

# スポーツイベントと 持続可能性

水Do! ネットワーク 事務局長 瀬口 亮子

## 東京2020大会を 給水スポット拡大の契機に 脱使い捨て、CO<sub>2</sub>削減、熱中症対策、まちづくりに貢献

### 使い捨て容器入り飲料の環境 負荷と水Do! キャンペーン

ペットボトルに代表される使い捨て容器に入った飲料を飲むことは、世界各地でごく一般的な消費スタイルになっています。日本では、ペットボトルは他のプラスチック容器包装とは別に分別収集されるため、現在約9割が回収・リサイクルされています。これは世界でもトップレベルです。ところが、それゆえに多くの消費者が「ちゃんとリサイクルされているから問題ない」と錯覚してきました。

ペットボトルをリサイクルしても、生産、輸送、販売、リサイクルといった商品のライフサイクルで多くの資源・エネルギーを消費し、CO<sub>2</sub>を排出しています。水道水を冷水器や水筒で飲んだ場合と比較すると、その環境負荷の大きさは一目瞭然です(図)。また、不適切に排出された一部のペットボトルなどは、河川や海岸で回収されるごみの上位アイテムになっており、深刻化する海洋プラスチック汚染の観点からも対策が必要です。

国際環境NGO「FoE Japan」は2010

年、ペットボトルなどの使い捨て容器に入った飲料ではなく、水道水を選ぶことで環境負荷の低減と人にやさしいまちづくりを進めようと「水Do!(スイドウ)キャンペーン」を開始しました。2014年からは、賛同団体で構成する水Do!ネットワークで活動を拡大展開し、SUSPON(持続可能なスポーツイベントを実現するNGO/NPOネットワーク)に参加しています。

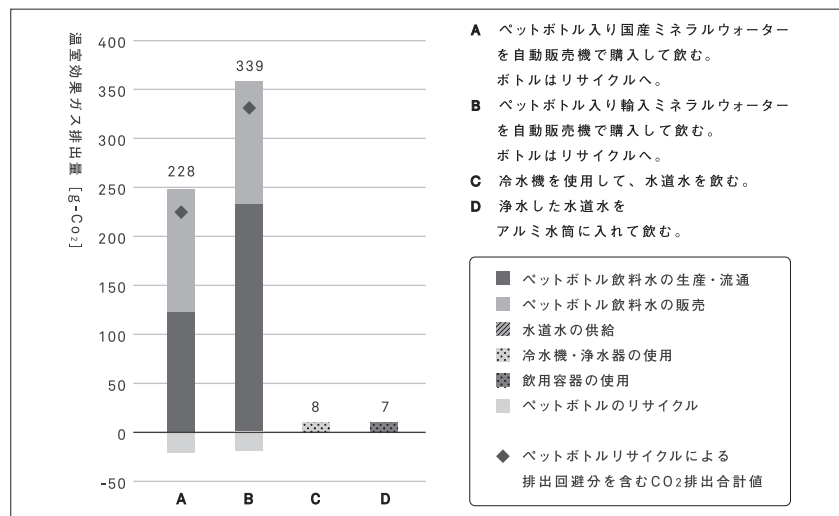
### イベント会場での給水対策

イベント会場での飲食により発生する使い捨て食器の削減については、

本連載第5回で紹介されたように、リユース食器導入の取り組みが各地で進められています。しかし、水やお茶はペットボトル入りで販売されているものがほとんどで、イベント会場で分別収集されたごみでもっとも多いのも、ペットボトルなどの飲料容器です(祇園祭ごみゼロ大作戦2016年データより)。

また、特に夏季のイベントでは、炎天下での活動や、長時間行列に並ぶことが多いため、熱中症患者が発生するリスクが高く、主催者はその対策として、来場者やスタッフに適

図 ペットボトル飲料水と水道水の環境負荷比較 (500ml 利用時)



※ 東京大学・平尾研究室による試算。FoE Japan 作成



写真1 ポーランドのスポーツイベントで、水道局職員手作りの仮設給水機を利用する参加者たち（写真はポートランド市水道局提供）



写真2 「Refill Japan」が導入予定の仮設給水機

切な水分補給の環境を整える必要があります。

そこで、水Do!ネットワークでは、イベント会場での給水コーナーの設置を、自治体やイベント主催者に呼びかけ、先進事例の紹介も兼ねたマニュアルも用意しています。

例えば、米サンフランシスコ市では、市の敷地・施設内で開催されるイベントで、ペットボトルなどの使い捨て容器に入った飲料水の販売を禁止しており、イベント主催者は、参加者への給水計画を提出することが義務付けられています。市は、イベントの規模に応じた給水機などを紹介し、環境に配慮したイベント運営のワークショップも開催しています。日本では、奈良県生駒市の上下水道部が、卓上型給水機を地域のイベント主催者に無料で貸し出しており、自治会の夏祭りなど、さまざまなイベントで活用されています。

## スポーツイベントにおける給水対策

スポーツイベントでは、出場者と観客双方への給水対策を考える必要があります。体育館やスタジアムなどは、もともとスポーツのための施設ですので、出場者用の一定の給水環境が整っていてしかるべきです。

また、出場者が自分の好きなスポーツ飲料などを持参することも多いと思われる。

しかし、大勢の観客が利用できる仮設の給水機などを十分に設置するケースは、世界的にもまだ少数です（写真1）。2012年のロンドン五輪、2016年のリオデジャネイロ五輪では、一部の会場で、給排水を担う業者がトイレなどと一緒に仮設の水飲み場を設置し、多くの来場者が利用していました。しかし、当時は、使い捨て飲料容器の削減などの環境対策と関連付けられていなかったようで、詳細な報告が見られません。

屋外で行われる競技の給水対策は、さらに課題があります。特に大規模なマラソン大会では、何万人ものランナーの水分補給のため、多くのペットボトルや紙コップが使い捨てられています。今年4月に英国で開催されたロンドンマラソンでは、一部の補給ステーションで、ペットボトル飲料水の代わりに、海藻から作られた一口サイズのカプセルに入ったスポーツ飲料が初めて配布されました。これによって、従来90万本以上使用されていたペットボトル飲料を約70万本に削減したとのことで、今後、このような取り組みが広がっていくかどうか要注目です。

## 給水スポットを東京2020大会のレガシーに

2020年の東京五輪・パラリンピック（東京2020大会）は、7月下旬から8月上旬という、日本でもっとも暑さが厳しい時期に開催されます。日本の暑さに慣れていない海外からの選手や観客も大勢訪れますので、熱中症患者が続出しないよう万全の体制を整える必要があります。

水Do!ネットワークでは、東京2020大会に向け、会場内での仮設給水機の大規模導入と水筒の持ち込みを認めることを、組織委員会などに働きかけてきました。

また、会場内だけでなく、東京の街中にたくさんの給水スポットをつくり、これをレガシーにすることを提案しています。今年5月末には、給水スポットを日本中に広げる集中キャンペーン「Refill Japan」を開始し、日本初となる水道直結式の仮設給水機（写真2）を各地のイベント会場などに導入するほか、スマートフォン向けに給水スポット検索マップを提供する計画です。

2020年が、東京そして日本各地の街の給水環境を変えるターニングポイントになるよう、多くの関係者の参加を期待しています。E